

名古屋大学文学部・人文学研究科・文学研究科・国際言語文化研究科 2021年度 授業評価アンケートに基づく授業改善事例

- ・今期は Zoom によるバーチャル対面で授業を行なったが、すべて IC レコーダーでも録音し、その音声ファイルをネット上に置き、その URL を毎週の授業後にクラス専用のメーリングリストで流し、資料の修正を行う担当者と期末試験のために復習する受講者たちに使ってもらった。
- ・学習の理解度を確認して欲しいとの意見があったので、毎週、配布プリントの始めに「復習」コーナーを設け、前の週のポイントを確認し学習内容の定着を計った。
- ・講義資料に従って講義を聴く一方になってしまうので発言もしたいということで、学生に講義資料の一部を朗読させ、課題の自作作品の朗読と解説も口頭でさせるようにした。
- ・スペイン語の聞き取り理解のために、メキシコの大学で教鞭をとっているメキシコ人の先生にオンラインで1限分をパワーポイントで授業していただいた。
- ・演習で教員が司会をしていたが、もっと議論を活発にしたいとの要望があり、司会を受講生に任せるようにした。
- ・授業アンケートで、配付資料に文献史料が挙がっていることを評価するコメントがあったので、これをさらに拡充した。
- ・用例の分類を Google スプレッドシート上でグループごとに行うことで、用例分析の訓練を行なった。
- ・リーディングの資料が難しいという意見があったので、エスノグラフィが作成された背景について、報告者が可能な限り調べることを指示するとともに、授業内で情報を共有した。
- ・対面と遠隔のバイブリッド形式の講義で、当初は遠隔で講義を受講する学生用にレジュメと録音を用意していたが、授業アンケートで教員の表情や身振り手振りなども知りたいという声があり、録画も用意した。
- ・抽象的な哲学概念の”現実味”を理解してもらうため、授業のはじめにあえて時事問題(国際政治、環境問題から芸能人のゴシップにいたるまで)をとりあげて意見交換させた。とりあげる時事問題は、前回の講義でとりあつかった特定概念に適合的なものをあらかじめ用意しておく必要があることは言を俟たない。
- ・当講義では「西洋」に限定せず、日本、東洋の思想史や哲学史、あるいは文学史にも触れるようにしていた。できるだけ誰もが知っている歴史的事象から始めて、徐々に細部に立ち入るよう工夫した。(例：ロシア革命と明治維新の思想史的位置づけに関する対照、欧州におけるラテン語から土着後／国語への変遷と日本の「言文一致運動」との対照、クリスマス起源と中世神学の成立との連関等々)
- ・教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」での郷土の版画家の作品展示を課題に授業を行ったが、出品作家の一人を授業に招聘し講義を行っていただいたことで、受講生の版

画、芸術家についての理解が格段に向上し、授業への取り組みも高まった。

- ・夏季休暇中に教養教育院プロジェクトギャラリー「clas」での展示を課題に授業を行ったが、コロナ禍で外部広報が出来なかったため、最近の博物館に求められる発信力の強化のための一助ともすべくブログを作成してもらい、事後に講評し、学生のモチベーションの維持を図った。
- ・発表の順番が固定だと偏りが生じる恐れがあるという指摘があり、適宜順番を変えて発表することにした。
- ・ディスカッションについて、クラス全員、小・中グループ他、テーマ等に合わせて様々な人数で実施した。
- ・学期末課題（エッセー）のインストラクションをより明確にして、例（実験の計画書等）を複数提示した。
- ・英語テキストの各章要旨を課題に出すことによって、議論の再確認につながった。
- ・各学生の発表のときに、近況についても尋ねて確認した。
- ・一部の学生を教室に集め、来日できていない学生を Teams 経由で参加させる「ハイブリッド型」の授業を行った。名古屋大学の「コミュニティ」の一員であることを実感してもらえるように、ちょっとした工夫を凝らした。例えば、授業中にインターネットに接続したウェブカム付きノートパソコンを教室から持ち出して、来日できていない学生に大学の「バーチャル」ツアーを行った。
- ・授業アンケートで「授業中にディスカッションする時間をもっと長くしてほしい」という要望が出たため、討論の時間を適宜、延長した。
- ・オンラインでの講義において、双方向性を保つため、学生の反応がすぐわかるように、「コメントスクリーン」というアプリを導入した。また、NUCT上で行った予習問題・復習問題の回答等を可能なかぎり共有した。

以上